

草津おみやげラボ

まちが一丸となって地元を意識し、地元の良さに気付く。世代や国籍を超えて様々なスキルを持つ住民が繋がることで、まち全体が活気付く。そんな地域の関わりを大切にして草津市を盛り上げる団体取材しました。



地元を知り、地元を愛し、地元の良さを発信する

草津おみやげラボは、草津市の魅力を発掘し、地域の方々のサポートを得ながら草津市の食、歴史や文化、生活に便利な情報についてワークショップ形式でイベントを開催し、市の良さを発信する活動を行っている団体です。宿場町として栄えた草津市を市民のみならず、まちを訪れる人に地域の温かみと面白さに触れながら楽しいお土産話として持ち帰っていただくことも望んでいるそうです。

「私たちはお土産屋さんではなく、草津市で出会うヒト、草津市にあるモノ、草津市で体験できるコト、これら全てを“草津のお土産”と定義しています。お土産を通して地域交流を増やしてまちを研究するラボとして社会を良い方向に持っていくことを目指しています。」そう話す草津おみやげラボ所長の大塚さんと事務局の角谷さん、中西さんにお話を伺いました。

得意分野を生かして、みんなが繋がる

大塚さんを含む事務局3名はもともと違う分野でそれぞれが活躍していました。国際交流の経験が豊富な中西さんは、外国人から京都でお土産を買ったという話を聞く度に、草津市にも素敵なお土産があるのに京都まで買いに行くことをもったいなく感じていました。愛媛県松山市出身の大塚さんは道後温泉が近所にあったため、お土産物も多く、草津市に移り住んでから出身地のことを聞かれても話のネタはたくさんあったので、京阪神のベッドタウンとして今も成長を続ける草津市の「便利」なイメージ以外にも草津市の自慢やお土産を作りたい思いが強くなりました。そして、情報発信を仕事にする角谷さんと2016年11月に「草津土産コンテスト2016」を通して一緒に活動する機会があり、3人が意気投合し、大塚さんの呼びかけから活動がはじまりました。

活動分野 観光・産業振興

スタッフ数 3名

団体設立 2016年

団体ホームページ

<https://kusatsumiyage.localinfo.jp/>

地元を学び、地元を意識する

実際活動を始めると、草津市にお土産がないのではなく、お土産はあるけど、その背景を知らなかったり、販売している場所を知らなかったり、草津市についての知識の未熟さに気付いたそうです。そこで、草津市のお土産を知るために、農家の方々や伝統を継承する職人、地元企業に協力をいただきながらイベントを企画し、同じく草津を知りたい学生と地域を学ぶワークショップや地域の問題点を共有して意見交換を行う等、様々な事業を展開されてきました。「はじめは、草津のお土産と言えば食べ物を想定して進めていましたが、最近は食材以外の目線から草津市の魅力を再発見しました。」と大塚さんは話します。

草津ならではの観光地を楽しんでもらえるように、現在は湖岸周辺に点在する文化財等をまめバスで巡るルートを模索中だそうです。

「地域を知れば知るほど地元の面白さを感じることができ、この発見ができる当事者になれる経験は別格です。」と角谷さんは語ります。

「遠くに刺激を求めに行かなくても、地元で楽しんで生活ができ、世代、国籍関係なく交流することで相手をより理解する機会が増えます。」と中西さんは草津市のPRに向けて意気込みを語ります。

草津市のお土産をコミュニティビジネスに

現在は、大学生にサポーターに入っただきながら交流の輪を広げ、親子でも参加しやすい工夫をしながら活動をされています。

「活動実績を上手く伝えることができているため、協力者が多く集まってくれています。」と大塚さんは感謝の気持ちを述べます。しかし、継続的な活動にするために、将来的にコミュニティビジネスとしての自立も考えているそうです。

今後は地元の食材を使った日持ちのするクッキーの開発や、まめバスを利用した観光地巡り、外国人を呼び込むための国際交流にも力を入れていきたいそうです。地域に関わりを持つ市民団体だからこそ繋がる要素や情報発信で盛り上がる草津市の未来がとても楽しみです。



▲ゲームを通して立命館大学学生とまちを学ぶ様子



▲うばがもち手作り体験



▲色々なお野菜のクッキー



▲草津商工会議所とコラボセミナー

取材＊メモ

活動内容や今後の目標についてお話をしている中、「ひらめいた！」と角谷さんが突然メモをとる姿が印象的でした。普段からメモを持ち歩き、思いついたことを必ずメモして事務局に相談しているそうです。事務局3名の特技や役割がバランス良く分散されており、楽しく活動している様子が伺えました。子育て中だから気づくこと、子育てが一段落したからできること、子育て経験が終わったから語れること。地域の住民が力を合わせて交流する姿を益々応援したく感じました。